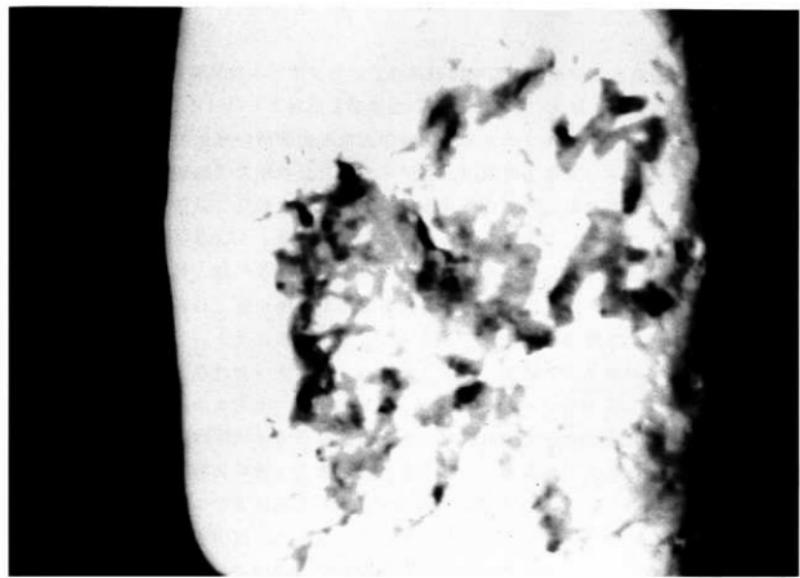


K-824

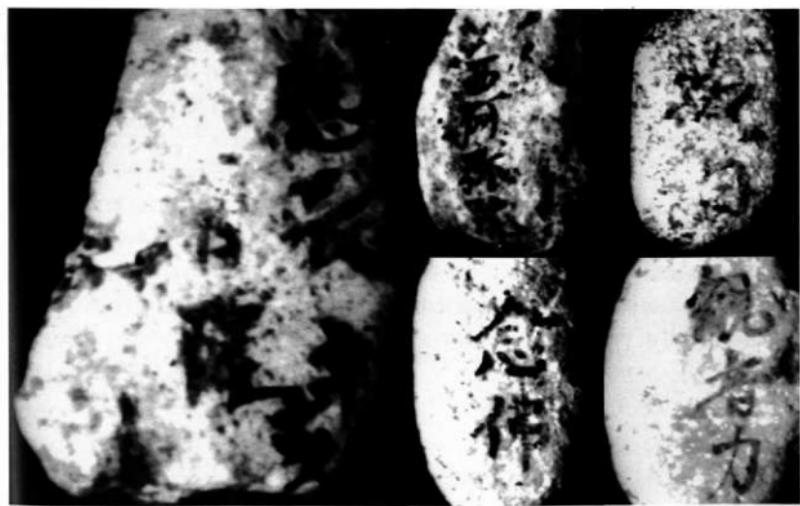
高野坊遺跡確認調査 報告書

1996

天童市教育委員会



赤外線撮影による墨書蹟の文字



序

本報告書は、社会福祉法人天童福祉厚生会の特別養護老人ホーム等建設事業に先立って、平成8年6月に社会福祉法人天童福祉厚生会の委託により、天童市教育委員会が主体となって実施した、高野坊遺跡の範囲確認調査の結果をまとめたものです。

大清水地区にある高野坊遺跡は、平成7年度に国庫補助を受けて実施した天童市内遺跡詳細分布調査で、新規に登録された平安時代から鎌倉時代の遺跡です。

現在の天童市を中心とする地域は、古代において、成生庄と呼ばれていました。今回調査した高野坊周辺は、自然条件に恵まれ、きれいな清水がこんこんと湧き出る風光明媚な場所です。成生地区は、歴史的には縄文や弥生時代から人々が生活を営んできた場所です。周辺では、古くから遺物が出土したり、一向上人が創建したといわれる仏向寺も成生にあったと伝えられています。また、近くには二階堂館跡があり、長い歴史を刻んできた場所であるといえます。

市民福祉の向上をめざして、社会福祉法人天童福祉厚生会では、この高野坊地区に、特別養護老人ホーム等建設事業を計画していますが、この建設予定場所が、遺跡を含む場所であることが、平成7年度の調査で明らかになりました。そこで、建設事業に先立って、緊急に範囲確認調査を実施したものです。

その結果、縄文時代の住居跡、平安時代から鎌倉時代にかけての堀立柱建物跡、さらには、「御庄 政所 藤原」、「應長 辛亥（西暦1311年） 西阿弥陀」等と書いた墨書き、「阿」という字の線刻跡などが発見されました。これらは、成生庄の歴史的解明の大きな糸口になるものとも考えられます。

こうしたことから、今後は、市民福祉の向上をめざした建設事業の計画と、すべての人々の共有財産である文化財の保護の両面を考え合わせ、相互の調整を計りながら、進める必要があります。そのためには、さらに詳しい発掘調査を実施することが必要と考えられ、この対応が今後の課題といえます。

今回発掘調査に携わっていただきました川崎利夫さん、村山正市さん、長南憲一さん、そして、発掘調査にご協力いただきました地権者の皆様、市福祉事務所の職員、特別養護老人ホーム明幸園の職員、そして成生考古学愛好会のみなさまに、深く感謝申し上げます。

また、調査について御指導いただきました山形県教育委員会文化財課、（財）山形県埋蔵文化財センター、東北芸術工科大学仲野浩先生、さらに関係機関・各位に衷心よりお礼を申し上げ挨拶といたします。

平成8年7月

天童市教育委員会

教育長 横田光正

例　　言

- 1 本報告書は、社会福祉法人天童福祉厚生会が実施する特別養護老人ホーム等建設事業に伴う高野坊遺跡の範囲確認調査の概要である。
- 2 調査は、社会福祉法人天童福祉厚生会の委託を受け、天童市教育委員会と特別養護老人ホーム建設準備室が主体となって、天童市教育委員会が担当し実施した。
- 3 調査要項は、下記のとおりである。

遺跡名 高野坊遺跡（平成7年度新規登録遺跡）

所在地 天童市大字大清水字高野坊

調査期間 発掘調査 平成8年5月1日～平成9年3月31日

現地調査 平成8年6月22日～24日

調査体制

調査担当 天童市教育委員会

調査担当者

調査総括 川崎 利夫（日本考古学協会員）

調査主任 村山 正市（日本考古学協会員）

調査協力 長南 恵一（山形考古学会員）

調査協力員 成生考古学愛好会

清野藤典、清野与市、式沢高二、大江豊子、黒川富子

植松礼三、後藤庄二、東海林ハナ、武田忠作、阿部謙弥

事務局 天童市教育委員会社会教育課

課長 伊藤 博明 主幹 長瀬 一男 主査 長谷川 武

調査協力 天童市福祉事務所

所長 植松 憲一 係長 土屋 信 主事 長澤 和彦

(社) 天童福祉厚生会

特別養護老人ホーム建設等準備室長 加藤 健治

臨時事務員 横本 宏

- 4 調査等にあたって山形県教育委員会文化財課、(財)山形県埋蔵文化財センター、東北芸術工科大学 仲野浩教授に御指導をいただいた。また、赤外線写真撮影にあたり、(財)山形県埋蔵文化財センター調査第一課長佐々木洋治氏、主任調査研究員安部実氏に御指導・御協力をいただいた。さらに、調査対象区内地権者、並びに地元の方々より御協力をいただいた。

5 本報告書の作成は、村山正市が執筆担当し、遺構の挿図作成は、主として長瀬一男、長谷川武が行った。編集その他は、長瀬、長谷川が担当した。

6 出土遺物、調査記録等は、天童市教育委員会が一括して保管している。

凡　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は、下記のとおりである。

S P --- 柱穴	S D --- 溝跡	S G --- 池・河川跡
S K --- 土坑	E B --- 柱穴堀方	R P --- 土器
R Q --- 石器・石製品		

2 遺構覆土の色調については、1995年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に掲った。

目 次

I 序 章.....	1
1 調査に至る経緯.....	1
2 地理的環境.....	1
3 歴史的環境.....	2
II 調査の概要.....	5
1 調査の方法と経過.....	5
2 基本層序.....	5
III 遺構と遺物.....	8
1 遺 構.....	8
2 遺 物.....	12
(1) 繩文時代.....	12
(2) 平安時代～鎌倉時代.....	12
IV まとめ.....	17
1 繩文時代.....	17
2 平安時代～鎌倉時代.....	17
3 墨書きについて.....	17
4 高野坊遺跡と成生庄について.....	18
引用・参考文献.....	19

報告書抄録

挿図目次

第1図 高野坊遺跡と周辺の遺跡.....	4
第2図 基本層序.....	5
第3図 東トレント北壁土層断面.....	6
第4図 高野坊遺跡周辺地形およびグリッド配置.....	7
第5図 検出遺構(1).....	10
第6図 検出遺構(2).....	11
第7図 出土遺物(1).....	13
第8図 出土遺物(2).....	14
第9図 出土遺物(3).....	15

図版目次

図版1 安全祈願、調査区の設定、調査風景	
図版2 東トレント、TP2、TP2柱穴検出状況	
図版3 TP5、TP6、TP7	
図版4 TP12焼土検出状況、TP13墨書き出土状況、TP17遺構及び遺物出土状況	
図版5 TP17土器・石器出土状況、TP18、調査説明会風景	

I 序 章

1 調査に至る経緯

高野坊遺跡は、平成7年度に文化庁の国庫補助事業で実施した天童市内遺跡分布調査によって周知された遺跡である。それ以前にも、地名などから仏向寺に関連ある遺跡が存在することや、遺物がたびたび出土している場所として知られていた。とくに、遺物のうち、鉢や板碑などは、寺院などの宗教的な色彩の濃いものである。遺跡の面積は、東西150m、南北120mの約18,000m²に及ぶ規模であると考えられる。

今回の遺跡範囲確認調査は、社会福祉法人天童福祉厚生会が事業主体となって平成8年～平成9年にかけて実施する特別養護老人ホーム等の建設事業に関連するものである。

天童市教育委員会が天童市福祉事務所、社会福祉法人天童福祉厚生会と協議を重ね、建設に先立って、建設予定地のどの範囲まで遺跡が広がるのか、また、どのような遺跡であるのかを確認するために、調査を実施することになった。

平成8年5月、社会福祉法人天童福祉厚生会理事会において、埋蔵文化財の調査を天童市教育委員会に委託して実施することになった。調査は、天童市教育委員会と特別養護老人ホーム等建設準備室が主体となって、天童市教育委員会が担当して実施することになった。

2 地理的環境

天童市は、山形県のほぼ中央部よりやや東寄にあり、奥羽山脈西側に位置する。高野坊遺跡は、天童市街中心部から西北西へ約5km、天童市大字大清水字高野坊を中心とした果樹園地帯にある。標高は約92mを測る。天童市大清水は、奥羽山脈の閑山付近や面白山付近に水源を発する乱川扇状地の扇端部に位置する。北は乱川・東根市荷口と、西は最上川と接している。

乱川扇状地は、白水川、村山野川、乱川、押切川等の河川によって形成された複合扇状地で、扇端部は、半径約11kmに及び、堆積土層は粘質土からなる。乱川扇状地の扇端部には、多くの湧水が分布しており、水量も豊富である。古くから、集落が形成され、人々が生活を営んでいた。

高野坊遺跡の付近では、箱清水、長清水、高野坊清水、三本柳清水など9か所の湧水があったといわれ、とくに長清水、三本柳清水は夏でも9°Cを計る。近くにある高木の湧水池には、山形県の天然記念物に指定されている、イバラトミヨが生息している。高野坊

遺跡周辺の現況は、畠地となっており、以前は全体が桑畠であったが、近年ではさくらんぼ、ラ・フランス、りんごを中心とする果樹園が広がり、西部は豊かな水田地帯となっている。

乱川と押切川が大清水の集落内を西流して最上川に注ぐため、昔からしばしば大雨により川が氾濫し、大洪水を引き起こして堤防が押し破られたり、耕作地が流失したり、ときには住居まで浸水した。また、両河川の流水は少なく、日照りのときには旱魃になる。

高野坊遺跡の周辺は、亂川層状地及び押切川の土砂の堆積によって形成されており、高野坊遺跡が立地している場所は、押切川が蛇行し、その堆積物によって形成された段丘の微高地である。周りを取り巻く低地は、旧河道路である。

3 歴史的環境

高野坊遺跡の付近には、古くから人々が居住していたと推測され、多くの遺跡が点在している。成生の後藤原や金谷などからは、編文時代中期の土器が出土している。成生にある地蔵池遺跡に代表されるような弥生時代には、湧水地帯に住居が営まれた。地蔵池遺跡は昭和39年度に天童市教育委員会によって発掘調査が行われ、ほぼ楕円形に近い形の堅穴住居跡や太い沈線や変形文字の文様をもつ土器、磨削編文を主とする編文晩期から弥生中期の棚倉式併行の土器が発見された。また、古墳時代末期の箱式石棺が成生橋の内から明治末年に掘り出され、碧玉製の管玉などが出土している。

本遺跡より北へ200m程のところに、二階堂屋敷跡と呼ばれる幅12m前後で長さ100m、深さ50cmから1mの空濠に囲まれた約一町四方の方形館跡がある。仏向寺がこの地にあったといい伝えがあるが、仏向寺は旧時宗の寺院で、寺院には方形の濠で囲まれた内部に伽藍配置をもつことは考えられず、地名が二階堂であることから、成生庄の地頭二階堂氏の屋敷とする見方もある。

いずれにせよ、この付近に成生庄の中枢的な政所などが存在する可能性が考えられる。平成2年3月に成生庄研究会の手によって小規模な試掘調査が行われ、その結果、柱穴と鐵鐵と考えられる鉄製品が出土した。柱間は1.9mで真北を向く建物と思われる。

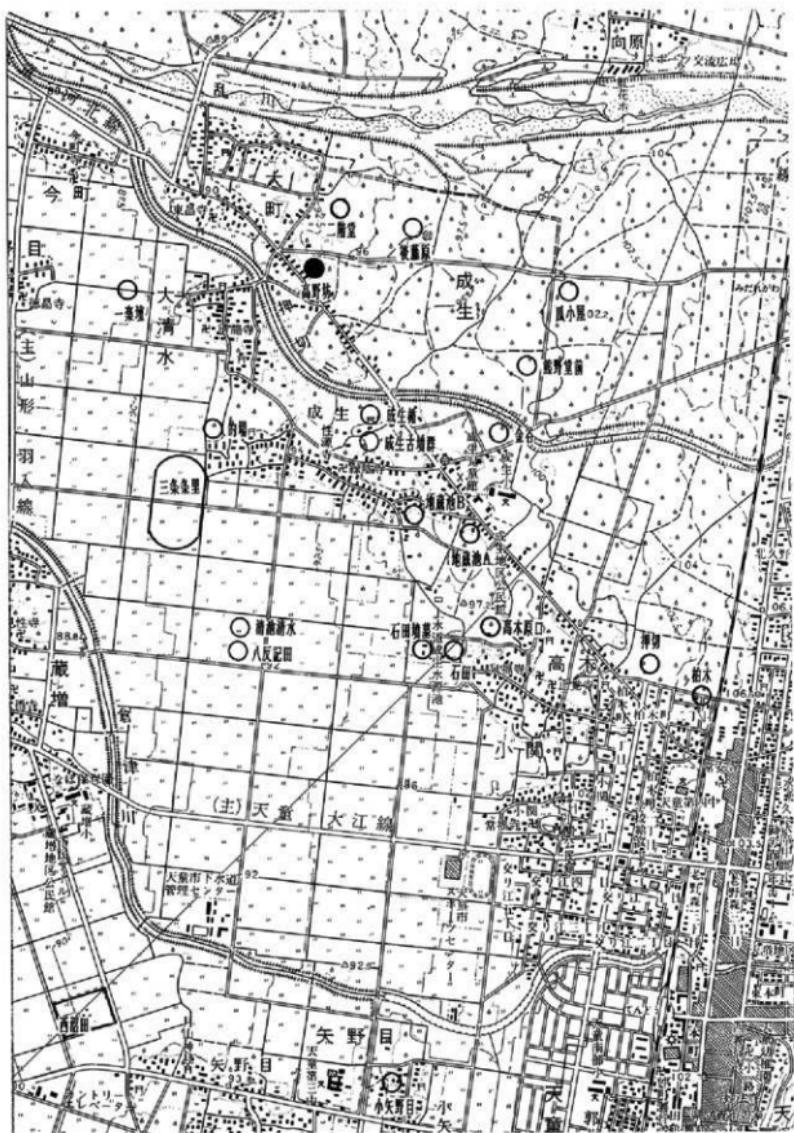
大正3年に小川周助氏は『山口村史料』（成生莊園の沿革）の中で、「仏向寺跡は二階堂屋敷と下馬止櫓の中間頃で築山や池跡がわかる」と書いており、地元の郷土史家奥山幸重氏は『成生の歴史雑考』の中で「下馬止櫓は仏向寺参道のもので（中略）尚谷地街道そばの地蔵尊は、もと仏向寺門前の一基といわれ」と考察をしている。

下馬止櫓は仏向寺の門前に鎌倉時代、成生庄の地頭で藤原兼家の御台所桜御前の病氣全快の記念に植樹したとの伝承があり、枝を切ると病気になるといわれていた。しかし、数回の落雷で上部は折れて枯れ、根元だけが残っていた。幹周り5mの大木であったが県道谷地街道拡幅工事の際に消失してしまった。奈良の法隆寺や橿寺などの門前に、下馬の石

碑があるように、下馬は、寺院の門前に設置されることが考えられる。このことから、大清水の下馬止櫓の伝承は、付近に寺院が建立されたことも示唆する。

大清水から庄野目へ通じる道路に沿って一本松があり、一乘壇と呼ばれた。昭和39年の水田基盤整備の際、近くから凝灰岩製の板碑が3基出土し、そのうちの1基に墨書きで、「応永九年（1392年）四月」等の文字が書かれていたといわれている。一乘壇は室町時代の墳墓と考えられる。その板碑は庄野目の徳昌寺の山門脇に安置されている。

大清水の周辺地域は、成生庄の政治的中心地であったろうともいわれており、古い地名には二階堂、高野坊、三条、寺中、橋の内、駅、下駅、亥の馬場、京壇、行段、小名言、御台田などが残っている。



第1図 高野坊遺跡と周辺の遺跡

II 調査の概要

1 調査の方法と経過

今回の調査は、特別養護老人ホーム等建設予定地について、文化財保護の観点から、遺跡の範囲、遺跡の性格、発掘調査の必要性の有無等を確認することを主な目的とした。

調査に先立ち、6月12日に教育委員会会議室において調査員打合せを実施した。6月20日に、地元の調査協力者との打合せを行った。それ以前に、天童市福祉事務所が地権者説明会において、調査に対する協力要請を行っている。

調査はまず、建設予定地内9,600m²の区域内に100m×100mの発掘区を設定することから始めた。基線は、建設予定地の北を走る市道乱川・大清水線に合わせて設定し、調査区域の東側低地については、任意に東西7m×南北2mのトレーナーを設定した。グリッド別に10m間隔を原則として2m×2mのテストピット(TP)を東西方向に10か所、南北方向に7か所に設けて、遺構および遺物の確認に努めた。さらに、遺跡の西南の場所にテストピットを1か所設けた。しかし、果樹園の立ち木を避けて設定したため、調査区全体にテストピットを設けることができなかった。

発掘の方法は、調査区域の東側低地については、重機械を用い、土壤の堆積状況を確認しながら掘り下げた。テストピットについては、土壤の堆積状況や遺構および遺物に注意しながら、スコップやジョレンなどを使用し、人力で少しづつ掘り下げていった。土色や土質の変化に着目しながら、各テストピットの精査を行い、遺構の存在を把握した。さらに、柱穴や一部の遺構について半裁し、観察を行った。

これら検出した遺構や遺物について、写真撮影・図面作成を行い記録にとどめ、人力で埋め戻しを行って、調査を終了した。

2 基本層序

本遺跡の基本層序は、現果樹園の耕作土である1層暗褐色土7.5YR 2/3、2層は桑畠時の耕作土で暗褐色土7.5YR 1/3を示し、この層から少量の土器片が出土している。2層下位には、平安時代後期から鎌倉時代の遺物を含み、3層明黄褐色粘質土10YR 6/4が遺構の地山となっており、地山を掘り込ん

0	
1層	7.5YR 2/3 暗褐色土
2層	7.5YR 1/3 暗褐色土
3層	10YR 6/4 明黄褐色粘質土
4層	地山

第2図 基本層序

で遺物包含層の黒褐色粘質土が存在する。南端のテストピット17では縄文時代の遺物が確認されており、3層形成時期は、縄文時代から鎌倉時代であると考えられる。

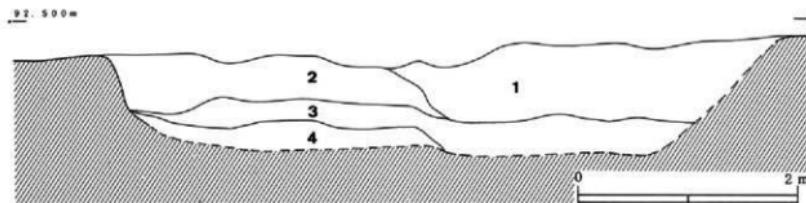
旧河道（東トレンチ）の層序は、次のとおりである。

1層は、埋土で旧水田面の土を一度重機で移動し、後に戻したものである。この層には、アスファルトの残骸や残土が混じる。

2層は、暗褐色を呈する粘質土層である。

3層は、一部粗砂、礫、泥等を含んだ黒褐色粘質土層である。この層は、旧河道の堆積層と考えられる。土層を全体的に見ると、旧河道による堆積層と考えられる。

4層は黄褐色土層である。基本的に川原砂と砂利で構成され、一部こぶし大の礫、粗砂が混じる。この層も、旧河道の堆積層と考えられる。



第3図 東トレンチ北壁土層断面



第4図 高野坊遺跡周辺地形およびグリッド配置

III 遺構と遺物

1 遺構

検出された遺構は、掘立柱建物跡に伴う柱穴 17 基、小礫群の土坑 1 基、焼土遺構 1 基、溝状遺構 1 条、柱穴 4 基などである。しかし、2 m × 2 m の限られたテストピットの範囲での検出であるため、全貌を把握するに至らず、本調査の資料を得るためにものであった。

次に、遺構・遺物について各テストピット (TP) 別に述べてみる。

TP 2 からは、3 基の柱穴を検出した。遺物は、須恵器杯、赤焼土器片、かわらけ片などが出土した。遺構検出層は、2 層下面の暗褐色粘質土で 3 層の明黄褐色粘質土を掘り込んでいる。柱穴は、大きさの異なりから、二時期に分けられ、1 つは掘形直径 8.0 ~ 9.0 cm、柱痕跡直径 3.0 cm のもの 2 基、もう 1 つは、掘形直径 5.0 cm、柱痕跡直径 1.5 cm のもの 1 基である。SP 2 を切る掘込みが南から北の方向に走っている。

掘形は、隅丸方形で、埋め土には、赤焼土器片が混入している。掘形の覆土は、明黄褐色粘質土と黒色粘質土が混じり合っている。柱痕跡には多量の炭化物を含まれる。柱穴を切っている落ち込みから線刻縦が出土している。

出土した礫は、直径 7 cm の隋円形を呈する扁平な安山岩の丸石に文字を線刻したものである。銳利な刃物を使用して表面に「阿」の字を線刻し、裏面は磨り減ったものとなっている。

TP 5 では、柱穴 2 基を検出し、その内 SP 4 は、掘形直径 7.0 cm、柱痕跡直径 3.0 cm のものである。掘形は、円形を呈し、SP 5 の掘形は、SP 4 と重複して不明であったが、柱痕跡直径 2.6 cm のものであることから、掘形は SP 4 とほぼ同じであろうと考えられる。SP 4 の掘形の土質は、明黄褐色粘質土に黒色粘質土が混じるもので、TP 2 の掘形の土質と同じである。柱痕跡の土質は、黒色土である。少量の赤焼土器片が検出面のⅢ層から出土している。東端は、後世の掘り込みによって破壊され不明であった。

TP 6 では柱穴 6 基を検出した。掘り方は不明であったが、6 基とも直径が 3.0 cm 程度で、SP 10、SP 9、SP 7 は建物に伴うものと推定され、SP 10 と SP 9 の柱間が 4 尺、SP 9 と SP 7 の柱間が 2 尺であった。

TP 7、8 は、4 層上面から河川の砂利と礫の層を確認した。北面土層と東面土層では、3 層の堆積が薄いが、西面土層では 3 層の面が厚く、小河川の南端であったと考えられる。TP 8 では完全に 3 層が薄く、2 層からすぐ 4 層の砂利礫層となっている。この小河川は、標高 9.2 m ラインが入り込んでおり、西へ流れているものと推測される。

TP 12 からは、隋円形を呈する浅い焼土を検出した。焼土は長さ 7.8 cm、幅 4.6 cm、深さ 1.0 cm 程度で土器片が混じっている。遺構検出面は 3 層下面で、地床炉の可能性も考

えられる。

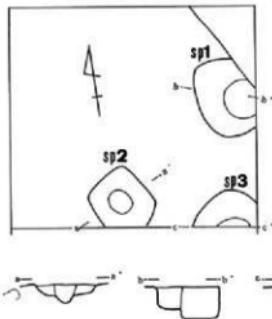
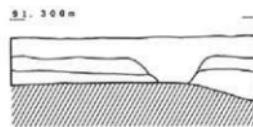
TP 13 では、東側のはば中央部に 9.0 cm 四方と考えられる小礫群の土坑のプランを検出した。遺構検出面は 3 層で表土から 3.0 cm 下である。検出面から出土した礫は扁平な河原石が多く、直径 7 ~ 1.5 cm 程度の丸石であった。採取した石は 20 点で、その内 9 点に墨書きされたと思われる墨痕が確認された。一部赤外線撮影をした結果、墨書きの内容は、「御庄 政所 藤原」、「農長 辛亥(表)、西阿弥陀(裏)」、「敬白」、「念佛」、「韻音力」、「法(法)」、「界」、「行」の墨書き文字が確認された。出土か所は、宗教的遺構と推察される。

TP 16 の西南端から直径約 2.5 cm のピットを検出した。ピットの検出面は 3 層の黄褐色粘質土に褐色の粗砂が混じる層で、表土から 3.6 cm 下である。

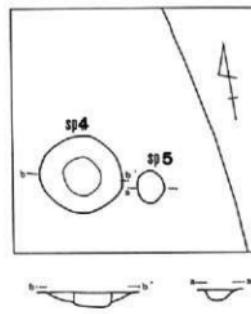
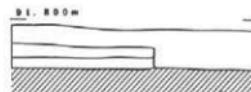
TP 17 からは、繩文土器片と石器 7 点が出土し、竪穴住居跡に伴うと思われる柱穴 4 基、張り床、地床炉に伴う焼土を検出した。遺構検出面は、Ⅲ層の黄褐色粘質土で、褐色の粗砂が混じりバサバサしている。柱穴は、直径 2.4 ~ 2.6 cm 程度のもので、プラン確認面に繩文土器片が出土した。地床炉は南東角でプランを確認したもので四半径 2.5 ~ 3.0 cm の円形と考えられる。柱穴から地床炉までの距離は、1 m 7.0 cm 程度で、その部分に張り床と思われる白色粘土混じりの黄褐色粘土が張り固められたよう、地面も固く土質もしみられている。張り床の厚さは 3 ~ 5 cm 程度と薄い。

TP 18 では、柱穴 5 基を検出した。その内の 3 基は掘形直径 6.0 cm、柱痕跡直径 3.0 cm の隋円形又は隅丸方形を呈する。遺構の検出面は 2 層下面で、明黄褐色粘質土を掘り込んだ掘立柱建物跡である。

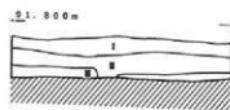
本調査の東側の低地（旧水田面）に 1 か所、東西 7 m × 南北 2 m のトレンチを設定して掘り下げた結果、低地部分は旧押切川と考えられる旧河道によって形成されたものであることが確認された。層序は、現地表面下 6.0 cm から下層にかけて、多量の礫と砂が混じる褐色粘質土が堆積している。さらにその下の層は、こぶし大の礫と、河川砂利の層であった。その砂利層は、西の方が少し薄くなるが、段丘の下に堆積していると考えられる。これらのことから、高野坊遺跡は、旧河道の西側に自然堤防として形成された段丘上に立地していることが考えられる。



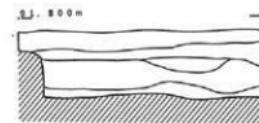
T P 2



T P 5



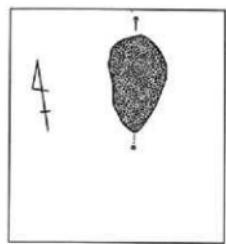
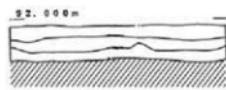
T P 6



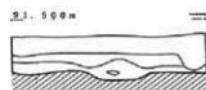
T P 7

0 2 m

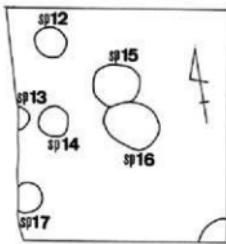
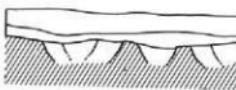
第5図 採出遺構(1)



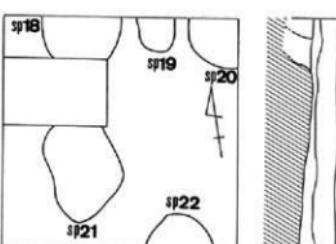
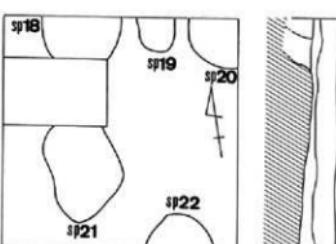
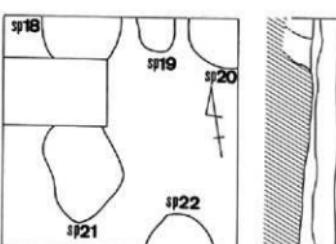
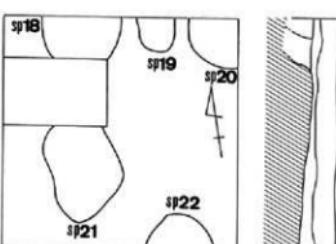
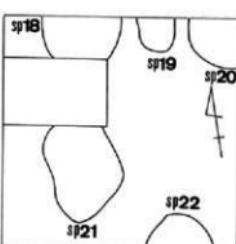
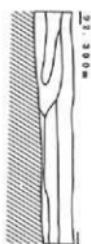
T P 1 2



T P 1 3



T P 1 7



T P 1 8



第6図 検出遺構(2)

2 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器片 24 点、石器 7 点、須恵器片 3 点、赤焼土器 15 点、内黒土師器 1 点、中世陶器 1 点、線刻甕 2 点、墨書き等 20 点、板碑 1 点である。

(1) 縄文時代

土器 (第 7 図 3)

胴部破片を主体とし、若干底部を含むもので、テストピット 16、17 から出土した。全体的に比較的緻密で、胎土に石英の小粒や細砂を含む。色調は、褐色系の色調を呈し、焼成は良好である。胴部破片は、黒色で磨滅がひどく、ぼろぼろした破片もみられる。底部破片は、底部径 12.8 cm である。外面は、磨消縄文の痕跡があり、内面にナデ調整が施されている。胴部破片の文様は、横走する LR を主体とした地文と、LR の斜位で縄文が細いものがある。また、テストピット 13 の西端から、褐色を呈し、細砂混じりの胎土で、鉢形土器の破片が出土している。文様は、弧線、曲線、渦巻の沈線と柳描き文をもつもので、器厚は 0.6 cm 程度である。

石器 (第 7 図 8・9)

TP 16、17 から、磨製石斧 2 点と調整痕を有する剥片が出土した。ほかに剥片が 5 点出土している。

(2) 平安時代～鎌倉時代

TP 1～5、13、14、18 より、内黒土師器、須恵器、赤焼土器が出土している。その半数は、赤焼土器で、壺、甕の破片である。また、TP 13 から須恵器片が 1 点出土しており、珠洲系の中世陶器であると考えられる。

須恵器 (第 7 図 3・4)

壺破片と甕の破片が出土している。杯は口径 13.7 cm、胎土は緻密で焼成も良い。他は杯の小破片である。

赤焼土器 (第 7 図 2)

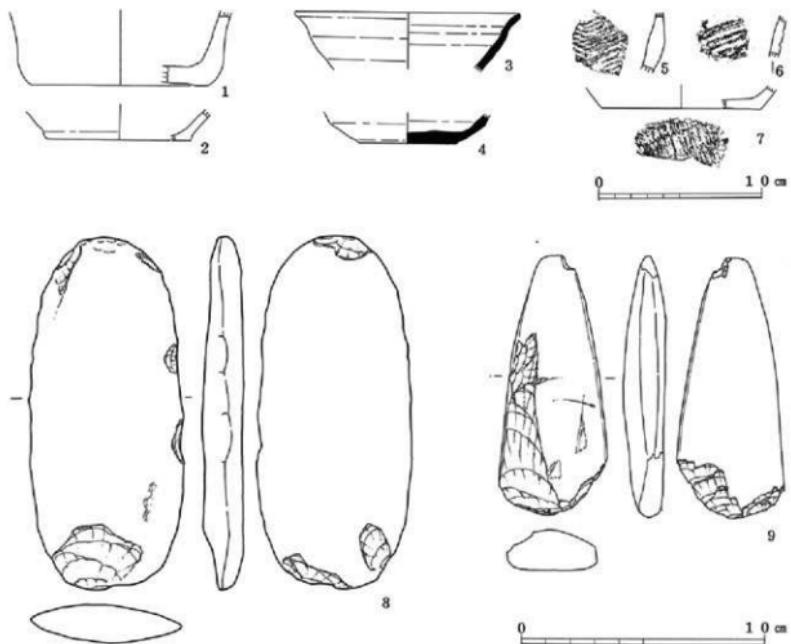
壺の破片で、底部破片である。壺は、底部切り離しを回転糸切り技法で行ったもので、無調整のものである。

土師器 (第 7 図 7)

内黒土器片が 1 点、TP 4 より出土している。他に土師器甕の底部破片で、底部径 17.5 cm、底部に網代目が残り、体部外面に条線状叩きが施され、内面に斜位のハケ目が施してある。

須恵器系陶器 (第 7 図 5・6)

須恵器系陶器は外面に条線状叩き目を施し、内面に丸いアテ痕を残す甕の破片である。



第7図 出土遺物(1)

TP 1 3より出土したもので、条線も斜に細く左右から叩き目を施している。いわゆる珠洲系陶器である。

線刻縹 (第8図 1)

TP 2より1点の線刻した河原石が出土している。河原石は直径7cmの扁平な丸石で、鋭利な刃物で「阿」を線刻したものである。

墨書縹 (第8図 2～6・第9図)

TP 1 3から小縹がまとめて出土しており、採取した縹は20点であった。その内、墨書痕のある石は9点確認できた。墨痕は薄くなつてはっきりしないものが多いが、その中で、「淡(法)」1点、「界」1点、「僧」1点、「観音力」1点、「行」1点、「御庄 政所 藤原」1点、「念佛」1点、「敬白」1点があった。このほかに記年銘のあるもので、直径6cmのもので表に「應長 辛亥□薩」、裏面に「西阿弥陀」とあるものである。これらは毛筆により、墨で直接一つの石に一字あるいは多字を書いており、宗教的遺構に伴う遺物であると、考えられる。

その中で注目すべきものは、「御庄 政所 藤原」の墨書と「應長 辛亥 □薩」の紀年銘の墨書である。御庄とは、その当時の庄園を意味し、政所とは政治の中心地や、そ



第8図 出土遺物(2)



-



7



-



8



-



9



-



0



10

5 cm

第9図 出土遺物(3)

の墨書きであることが考えられる。また、年号の應長紀年銘は、西暦1311年を示すものである。

天童市の東部山間地の若松寺に安置されている、弘長3年（1263年）に成生莊政所の藤原真綱が奉納した聖觀音懸仏に、「當庄御政所・・・」との銘文がある。「御庄政所 藤原」の墨書きは、成生莊の存在うかがわせるもので、中世の歴史解明のための大きな手がかりになる、貴重な墨書きであると考えられる。

板碑

板碑は、調査区東側の土を寄せた高まりのところから表土採取されたものである。頭部から額部までの現存高20cm、幅26cm、額下厚さ15cm、額部の突出1.8cm、頭頂部高5.5cm、頭頂部幅13cmを測る小形板碑で額下は壊れている。頭頂部は丸く反りをもって立ち上がる山型を呈し、額部が突出し、二条線をもつ形態である。いわゆる成生莊型板碑と分類されるものである。

IV まとめ

高野坊遺跡は、乱川扇状地の扇端部で湧泉が多く分布する標高92mの段丘上に立地している。調査は、建設予定地内のテストピットに限定されていたため、遺跡の全容を把握するまでに至らなかったが、縄文時代と平安時代後期から鎌倉時代にかけての遺構と遺物を検出することができた。

1 縄文時代

縄文時代に属する明確な遺構は、TP17に限られ、一部はTP16にも分布する。TP17のⅢ層から縄文土器が集中して出土し、Ⅲ層下面に張り床と地床炉、ピットを検出したことから竪穴住居跡と推定される。ピットからも縄文土器の小破片が出土している。縄文土器は、底部破片1点を除き、ほとんどが小破片で、地床炉付近を中心として出土した。文様は弧線、曲線文を主体とする小破片がTP13より出土し、他はLRを横位に施した地文であり、一部斜位に施した細かい縄文の地文もみられる。底部破片は粗製の鉢形土器のもので、磨消縄文でナデを施したものであった。時期的には縄文時代後期の南境式併行期のものを主体としたと考えられる。この時期には、高木石田遺跡にも集落が営まれており、同形態の土器は、遼佐町神矢田遺跡、村山市作野遺跡からも出土していることから、これらの関連について、今後の課題となる。また、天童市内の縄文時代の様相を知る一つの手掛かりとなろう。

2 平安時代～鎌倉時代

平安時代から鎌倉時代の遺構は、掘立柱建物跡に伴う柱穴と溝状遺構、墨書きを埋納した土坑などを検出することができた。掘立柱建物跡に伴う柱穴は、掘り方が方形を呈し、直径7.0～8.0cmと大きく、柱痕跡も直径3.0cmと大きい。これらは、TP2、5、6で検出し、柱穴の重複關係などからⅡ～Ⅲ期に分けられる。TP18の柱穴は隋円形、隅丸方形を呈し、下馬止めの櫛よりほぼ北に真っ直ぐの位置にある。遺物では、TP2から出土した礫に「阿」(あ)の文字が線刻されていることを確認した。どのような意味をもつか、今後調査検討が必要である。

3 墨書きについて

TP13から90cm四方の土坑プランが確認できた。確認面はⅡ層下面である。土坑から採取された礫の大きさは一定せず、5～10cm程度の河原石である。今回の調査で採取した墨書きは、僅かであるが、今までに解明されていなかった問題にメスを入れる資料が出土した。それは、成生莊の政所をうかがわせる墨書きと紀年銘の墨書きされた礫である。

4 高野坊遺跡と成生庄について

高野坊遺跡付近の成生庄は、すでに安元2年（1176）の『三宝院文書』によると、『八条院領目録』に「庁分御庄」とみえ、その頃は皇室御領であった。その後、後宇多院の『御領目録』にも「御庁分」として成生庄と大山莊が記されてある。鎌倉時代に入ると名目上はともかく、実質上「鎌倉莊」の支配下に服したのであろう。「吾妻鏡」宝治3年（1250）2月の条に「奥州に入り藤原泰衡を征討し、鎌倉に罷らしめ給ふの後、陸奥出羽兩国知行せしむべき由」とあり、出羽國は藤原氏が滅ぼされた後は鎌倉幕府の直轄地となり、御家人が支配するようになる。その中で出羽守に任せられたのが中條氏と二階堂氏であった。とくに二階堂氏は、藤原氏の南家系統で、二階堂行藤は正応元年（1288）に出羽守となり、正応3年（1291）に出来て道暁と号した。その子、貞貢も出羽守に任せられ、元応元年（1319）に出来て出羽入道道蘿と称したことが『尊卑分脈』に記してある。

さて、調査によって検出した墨書蹟等は20点、その内9点に墨書が確認できた。その中で、成生庄を意味する墨書は「御庄 政所 藤原」である。御庄は荘園を示し、政所は庄の行政庁の中心あるいは、その肩書きを意味すると推察される。これは、成生庄政治を司る場所を示唆する貴重な資料である。

高野坊遺跡の北へ100m程のところに二階堂屋敷と称される1辺120m、つまり一町四方を幅12mの濠で囲まれた居館跡があり、地名から成生庄地頭二階堂氏に関連した鎌倉時代の居館跡と推測されている。二階堂氏は、前述したとおり藤原氏である。また、最上三十三観音第一番札所の鈴立山若松寺の内陣に掲げてある国指定重要文化財の聖観音懸仏に、弘長3年（1263）に成生庄政所の藤原真綱らが奉納した銘文が陰刻されている。それには「當庄御政所 芳ノ比丘尼 高木比丘尼（略）大檀那藤原真綱敬白（略）」とある。もう一つの関連する資料として、武藏国称名寺の金沢文庫に収められる「俱舍七十五法名目」の奥書に「建仁元年歲次辛酉五月一日書寫之了 直顯一乘宗末流僧尊曉覺房先生六十三 成生御庄小畠村寺治書了 見此人南無阿彌陀仏可唱給」とある。成生庄へ向して在留した僧が書寫して持ち帰ったものであろうか。

紀年銘を示す墨書では「應長辛亥 □薩」とあり、裏面に「西阿彌陀」と墨書されている。應長の年号は鎌倉時代後期、西暦1311年の約10ヶ月たらずの期間の年号で、干支も辛亥の年である。裏面の「西阿彌陀」は、時宗一向派の法名で用いられる阿字号である。とすれば、應長辛亥（1311）に西阿彌陀という人物がいた可能性が考えられる。他の墨書は仏教関連の一部と思われる文字が多く、「念佛」などは念佛信仰を示すものであろう。

蹟石經では、文献上に、建武4年（1337）に成立した『東大寺縁起絵図』第13巻に延喜年中（901～922）に東大寺南門に大なる蜂が出現し、石に書経して埋めて築造したことが記され、『平家物語』巻第6の築嶋に平清盛のとき福原に「經の嶋」を築き、船の往来を護った話が述べられている。応保元年（1161）から3か年かけて「石

の面に一切經をかひてつかれたり」とある。実際に経碑の銘として最も古いものは、大分県大野郡朝地町普光寺参道脇に建てられた八面石幢が知られ、「淨土三部經一石一字（略）光明真言万三千層必處 三月三日」と刻まれており、暦応2年（1339）には蹟石經の存在は知られていた。しかし高野坊遺跡の場合には、それよりも28年前に築造されたもので、これが蹟石經だとすれば、全国的に最も古級の事例となるであろう。また蹟石經に直接紀年を記したものとしては、福島県会津坂下町中目経塚の天文13年（1544）があるが室町末期のものである。

仏向寺は「仏向寺縁起」の巻物によれば、成生庄に下向してきた一向後輩によって弘安元年（1278）に源頼直の招きで念仏道場を開基したことが記されている。また寺宝として伝えられる念仏経に「義阿 義空菩薩 永仁三年三月日」の陰刻があり、義空菩薩すなわち一向後輩の使用したものを、弟子の義阿が陰刻したものといわれている。

仏向寺は、時宗一向派（天童派）の本山で、末寺が山形県内に50余寺があった。現在は淨土宗に改宗したものの、中世から近世にかけて勢力を伸ばし栄えた寺院である。付近の二階堂からは、念仏経が出土し「室町住出羽大掾宗味作」と銘が陰刻され、隣接する寺中からは大日如来の鉄製懸仏が出土している。

墨書蹟については、数少ない出土であったために、その性格を把握するまでには到らなかった。今後の発掘調査によって遺構・遺物の資料によって、正確な内容の把握が可能になるであろう。

今回の試掘調査では期間が制限されたが、高野坊遺跡からは、僅かではあるものの、成生庄など天童の中世の歴史を解明する上で、極めて貴重な資料が得られた。今後の詳細にわたる発掘調査によって、その全貌の解明が期待される。

<引用・参考文献>

- 小川周助 『山口村史料』 大正3年
奥山幸重 『成生の歴史雑感』 昭和54年
天童市史編さん委員会 『天童市史別巻上』 昭和54年
立正大学考古学研究会 『蹟石經』 平成6年
大清水のあゆみ編さん委員会 『大清水のあゆみ』 平成7年
村山正市 『石にこめる願い — 天童市の一字一石經と回國納経の世界 —』
天童市教育委員会 『市内遺跡分布調査報告書』 平成7年
天童市教育委員会 『市内遺跡分布調査報告書』 平成8年

写 真 図 版

図版1

調査協力員による
安全祈願



調査区の設定作業



テストピットを手作業
で掘下げ



図版2

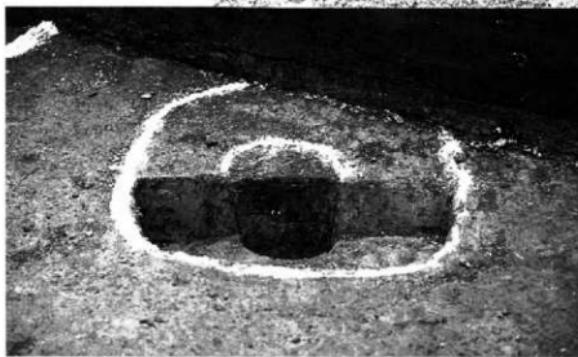


東トレーンチ

テストピット2

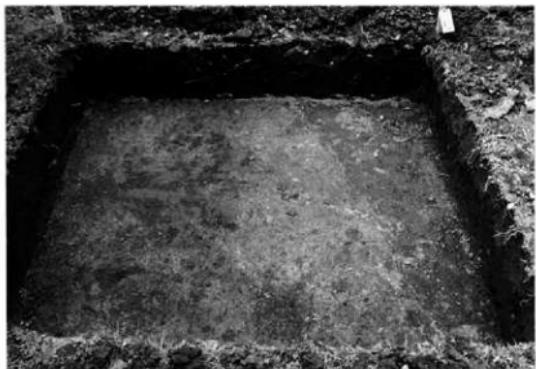


テストピット2の
柱穴小さい状況



図版3

テストピット5



テストピット6



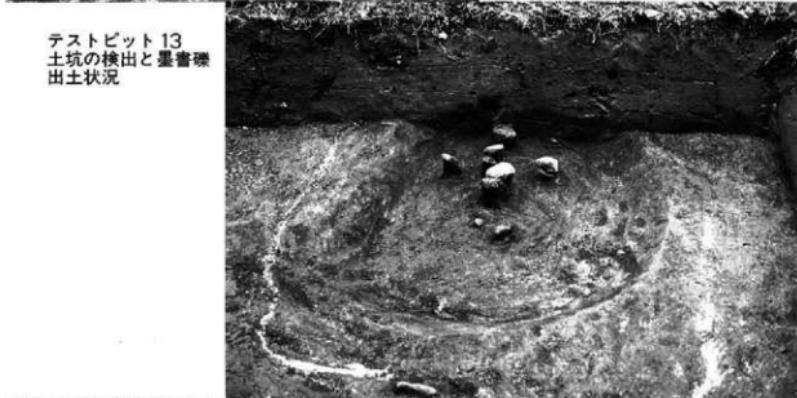
テストピット7



図版4



テストピット 12
焼土面を検出



テストピット 13
土坑の検出と墨書き
出土状況



テストピット 17
ピットと遺物出土状況

図版5

テストピット 17
出土した土器と石斧



テストピット 18

調査結果の説明会



報告書抄録

ふりがな	こうやう いき かくにんちうさほいくし
書名	高野坊遺跡確認調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	天童市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第12集
編著者名	村山 正市、長瀬 一男、長谷川 武
編集機関	山形県天童市教育委員会
所在地	9994 山形県天童市老野森一丁目1番1号 ☎0236-54-1111
発行月日	西暦 1995年7月3日

所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村 道番号					
高野坊遺跡	天童市大清水字 高野坊地内	6210	38度 23分 10秒	140度 21分 10秒	19960622～ 19960624	86	特別養護老人 ホーム建設等 に關わる遺跡 確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高野坊遺跡	集落跡	繩文、平 安、鎌倉 時代	土坑、柱穴 住居跡	墨書き 繩文土器 須恵器 石器	墨書きに「應長 元年、御庄 政 所 藤原」など の文字を確認。

天童市埋蔵文化財報告書第12集

高野坊遺跡確認調査報告書

平成8年7月31日

発行 天童市教育委員会

〒994天童市朝霞一丁目一番一号

TEL 0236-54-1111

印刷 豊田太印刷所

山形市立谷町二丁目938-8

TEL 0236-86-2518(㈹)